

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02273

研究課題名(和文) 日本近代文学における編集文献学の構築と確立のための研究

研究課題名(英文) Research for establishing scholarly editing in Japanese modern literature

研究代表者

宗像 和重 (MUNAKATA, Kazushige)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：90157727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代文学の分野において、編集文献学という新たな研究分野の構築と確立をめざしたものである。

具体的には、明治期以降の個人全集の歴史的経緯、および編集の文法を明らかにすることを主たる目的として、文献の整備と資料の収集に努め、特に近代文学の開拓者である坪内逍遙の著書の収集に力を注いだ。それらを通して、いまだ定本全集がない坪内逍遙の全集編纂の可能性を検討し、その著書を全集として編集する過程を実践することで、近代文学の活字の本文成立の問題や、近代作家のテキスト・著書の多様な成り立ちを実践的に明らかにすることができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：This research aims at the construction and establishment of a new area of research which are called scholarly editing in the field of modern literature.

Specifically, I set it as the main purpose to clarify the historical circumstances of the individual complete works after the Meiji term, and grammar of edit. Therefore, I did my best in maintenance of literature, and collection of data. I especially directed power towards collection of the work of Shoyo Tsubouchi who is a pioneer of modern literature. Shoyo Tsubouchi does not have still acknowledged complete works. I examined the possibility of Shoyo Tsubouchi's complete-works compilation. And I practiced the process in which I edited the work as complete works. It is the problem of this formation of the printing type of modern literature that I tried to clarify by it. And I was able to clarify practically various formation of the text and the work of a modern writer.

研究分野：日本近代文学

キーワード：近代文学 文献学 書誌学 原稿 坪内逍遙

## 1. 研究開始当初の背景

日本の近代文学の成立は、日本における活版印刷の普及の時期と重なっている。あらためて確認するまでもなく、15世紀半ばにドイツのグーテンベルクが創始した活版印刷の技術が日本において普及するのは、約400年後の明治初期のことであった。それまでの木版印刷とは異なり、良質な本文を大量に流布できる条件が整ったことと、教育の普及によって識字層が増大したことが、近代文学成立の大きな要因であった。すなわち、近代文学は文字通り「活字の世界」(前田愛)の所産であるといつて過言ではない。

具体的に言えば、一つの作品はまず肉筆の原稿として執筆され(もちろんここにも、草稿から清書稿にいたるさまざまな段階があり得る)、新聞や雑誌という新しい時代の活字媒体として発表(初出)されたのち、単行本としてまとめられる(初刊)。そして作品によっては、その単行本が版を重ねたり(重版)他の作品集として再編集され(流布本)また作家の没後に個人全集として集大成されるとともに、文学全集・文庫本・教科書などとして今日の読者にも読まれることになる(いうまでもなく、すべての作家や作品がそうした段階を踏むわけではない)。そしてこの間、作家による推敲・訂正の作業のみならず、誤記・誤植や版面の違いを含めて、本文にはそのたびごとに異同が生じ、一つとして同じ本文はない。

研究代表者はこれまで、『志賀直哉全集』(岩波書店刊)、『岩野泡鳴全集』(臨川書店)、『徳田秋聲全集』(八木書店刊)など、近代文学にかかわるいくつかの個人全集の編集・校訂作業に従事し、こうした近代文学の本文の諸相に目を向ける機会があった。現在も、刊行中の『山田美妙集』(臨川書店刊)の編集に参加し、山田美妙の本文の校訂作業に従事している。こうした経緯をふまえ、これまでも、近代文学における本文の生成と異同の問題を、明治期以来の個人全集における本文校訂の諸相を中心として調査・検討してきた。また、『グーテンベルクからグーグルへ - 文学テキストのデジタル化と編集文献学』の翻訳者で、日本における「編集文献学」の提唱者でもある明星聖子氏を研究代表者とする「編集文献学に関する総合的研究 - 日本の人文学における批判的継承をめざして - 」(基盤研究(A) 2011~2015年度)にも研究分担者として参加し、ドイツを中心とするヨーロッパや、日本の古典文学における文献の編集・校訂をめぐる研究の現状と課題から多くのことを学んでいる。この『グーテンベルクからグーグルへ - 文学テキストのデジタル化と編集文献学』においてシリングスバークは、自身が従事したサッカー全集の編集について「オリジナルのドキュメントを集め、照合し、修正し、テキストの歴史を示したり変更の責任がどこにあるかを特定したりするための資料を集成し、

それらの資料を本文の脚注と付録に配置し、できあがった仕事の正確さを検証する - - これが、一九七六年に始まり、一九八九年から二〇〇五年までの間に八巻の刊行が済んでいる、大きな編集プロジェクトの仕事の内実であった」と述べている。こうした作業は、もとより近代文学の個人全集においてもおこなわれているが、これまでは個々の本文校訂の問題として考えられ、「大きな編集プロジェクトの仕事の内実」を「編集文献学」の立場から総合的に考察することが少なかった、という問題意識が、研究開始当初の背景にある。

## 2. 研究の目的

この研究は、近代文学の分野において、編集文献学という新たな研究分野の構築と確立をめざすものである。ここでいう「編集文献学」は、上記のピーター・シリングスバーク著、明星聖子他訳『グーテンベルクからグーグルへ - 文学テキストのデジタル化と編集文献学』(慶応義塾大学出版会、2009)の用語と概念による。文学研究の課題は、いうまでもなくテキストを読み解くことにあるが、そのテキストは、肉筆の草稿・原稿類から活字の本文として編まれ、新聞・雑誌・単行本等から没後の刊行物や今日の文庫本等の流布本にいたるまで、大小さまざまな異同を生じる。その編集過程を明らかにし、本文校訂の実態を確認することは、個々の作家や作品を対象として行われてきたが、「編集文献学」という新たな、統合された概念のもとで再構築することをめざす。具体的には、次の諸点を明らかにすることを目的とした。

(1) 肉筆の原稿類から活字の本文への過程の考察。近年、作家の草稿・原稿類への関心の高まりと、デジタル化の技術の発達によって、作家の草稿・原稿類の翻刻やデジタル化が進んでいる。これらを通して、原稿が活字の本文として流通するまでの過程を、近代の活版印刷の機構のなかで具体的かつ詳細に考察することが求められている。

(2) 近代作家の個人全集の誕生と変遷の歴史的経緯の考察。近代作家の個人全集は、明治30年代の『一葉全集』『透谷全集』などを出発点とし、『漱石全集』などを代表として数多く編まれてきた。それらをあらためて確認し、時代的な変遷のなかに位置づけることで、近代の文学にとって個人全集とはどのような存在であったか、また日本の読書環境や書物として個人全集の担ってきた役割が何であったかを考察する。今日のいわゆる文学離れや、経済的な背景、さらにデジタル化といった複合的な要因によって、かつてのような個人全集が編まれる機会はきわめて少なくなっているが、その考察を通して、近代日本における「文学」の歴史的な意義も浮かびあがってくるはずである。

(3) それぞれの個人全集における「本文校訂」の方針に関する調査・検討。従来、個

人全集において一般的に底本とされてきたのは、作家が最後に刊行した単行本の本文であった。そこに、作家の最終的な意志が反映されていると考えられたからである。ただ、その場合、『鷗外全集』において、明治20年代に書かれた小説「舞姫」の底本が大正期の単行本とされているように、執筆年代との間に大きな隔たりを生じる場合も少なくない。そのため、新聞や雑誌といった初出の本文を底本として採用される場合もあり、また近年は、肉筆の草稿・原稿への関心の増加ともあいまって、原稿を底本とする本文作成の試みもおこなわれている。これらには、個々の全集編纂者の方針というにとどまらず、近代文学の本文をめぐる歴史的な経緯も少なからず反映し、その時々本文意識を考察する大きな手がかりとなる。また、作家や研究者、編集者によっても本文をめぐる意識には違いがあり、個人全集は、そうした本文生成の場としてきわめて興味深い観察の対象である。本研究の課題である「編集文献学」の中核は、この個人全集の編集・校訂方針をそれぞれの全集に即して検討するとともに、それらがいかなる文法と機制によって編まれてきたかを、欧米や古典における編集文献学の成果を視野に入れながら考察しようとするものである。

(4) デジタル化時代における本文のありかたをめぐる考察。今日、電子書籍の普及など、出版においてもデジタル化が大きく進展しており、そのなかで、オンライン版による個人全集刊行の試みもおこなわれている。また、原稿から初出、単行本、流布本にいたるまで、すべての本文を画像にしてそのまま示すといった、かつては考えられなかったことも可能となってきており、そうしたなかで、文学作品の本文とその校訂のありかたをどのように考えるかは、編集文献学の大きな課題であるといわなければならない。

### 3. 研究の方法

研究の初年度である平成27年度は、資料の収集と研究を進めるための文献の整備に努めた。具体的には、まず明治期以降の個人全集の歴史的経緯を明らかにするために、その調査とリストを作るための作業を行った。国立国会図書館・日本近代文学館・早稲田大学図書館といった図書館・文学館等での調査を中心とし、あわせて書店・古書店等から、近代の個人全集類や関係する参考文献を収集することも必要な作業であった。もとより、全集・叢書類については、『全集・叢書総目録 明治・大正・昭和戦前期 2 科学・技術・産業・芸術・言語・文学』（日外アソシエーツ）などの資料もあるが、近代文学にかかわる個人全集のみを対象として、その歴史的な経緯を整理したものはまだないのが現状である。

これとあわせて、近代文学（とりわけ小説）

に関わる草稿・原稿類の調査・収集が不可欠であった。今日では、一つには複製技術の進展にともなって、もう一つには肉筆資料への関心の増加に対応して、近代・現代作家の草稿・原稿・ノートなどの肉筆資料の復刻やデジタル化が盛んに行われている。それらの中には、一般に市販されているものだけでなく、各地の図書館・文学館・資料館などで作成・販売されているものも少なくないが、その実態はまだ十分に確認されているとはいえないので、その調査と収集をも積極的に進めていった。もとより、復刻やデジタル化されたもののみでなく、上記の国立国会図書館・日本近代文学館・早稲田大学図書館などを中心として、所蔵されている実際の草稿・原稿類の調査と確認が必要であったことは、いうまでもない。これらの草稿・原稿類のなかには、現在でも古書市場で流通しているものもあり、総じて高価であるものの、研究上必要不可欠の設備備品として購入・収集したものがある。

次に、こうした調査・収集と平行して、それぞれの全集における校訂方針を検討する作業を進めていった。具体的には、全集の凡例や解題を通して、それぞれの編集・校訂方針を確認するとともに、収録されている作品の本文について、どのような形で具体的な校訂がおこなわれているかを調査した。個人全集は、その著者の網羅的な作品・テキストの収集と、信頼できる本文校訂ということを大きな特色としており、全集の校訂の理想は、誤記や誤植などを修訂しつつ、読者が「原文」に戻れる方途をいかに確保できるかにある。そのために、「校異表」の作成や解題の記述など、全集ごとにさまざまな工夫がほどこされているが、そもそもどこまでを誤記や誤植として処理できるかも曖昧であり、またたとえば初出の雑誌と単行本の間での異同をどれほど詳しく記述しても、実際にすべてを「原文」に復元することはきわめて難しい。そうした困難に、それぞれの個人全集がいかに対処しようとしているかを、時代をたどりながら整理していくことで、文学テキストの流通と受容の歴史的足跡をあらためて確認することにもなった。

研究2年度にあたる平成28年度においては、まず、初年度の個人全集の調査および校訂方針の確認の作業を継続的におこなった。たとえば、近代日本の代表的な個人全集として『漱石全集』があり、漱石の没後から今日まで、岩波書店を中心にして数多くの版を重ねている。その時々編纂・校訂方針は、時代の本文理解の水準を示すものともなっており、この点については矢口進著『漱石全集物語』（青英舎、1885）のような先行研究もあるが、他の個人全集、および個人全集全般についてこうした足跡をたどることができる年表や著作の準備を具体的に進めていった。そのためには、岩波書店や筑摩書房など、

個人全集の編集・刊行に熱意を注いできた出版社の事業についても調査・確認を進めていく必要があった。日本においては、個人全集刊行が個人の研究者や公の機関によって企画・主導される例はきわめて少なく、出版社の事業として企画・刊行される場合がほとんどであり、そのことから、個人全集をめぐる研究はおのずから出版社の研究へと向かうことにもなる。

また、この2年度には、こうした個々の全集の調査を進めるとともに、本研究の課題である「編集文献学」の構築と確立をめざす作業の一環として、肉筆の原稿類から活字の本文への過程の考察、具体的には、図書館・文学館所蔵の原稿類、また復刻刊行されている原稿類の調査・収集を通して、印刷と出版の過程を明らかにする作業を進めていった。近年、作家の草稿や原稿・ノートなどの肉筆資料類への関心が高く、文学テキストの生成の過程をより精緻に考察しようとする傾向にあるが、そのためには、数多くの原稿類に目を通すこととあわせて、一人の作家の創作の営みのなかで実際にどのような形で原稿が執筆され、出版・刊行されてきたかを確認する作業が必要であった。岩野泡鳴・宇野浩二といった作家の日記には、こうした原稿執筆の経緯や原稿料に関する具体的な記述がみられ、そのような作家の日記などを調査・検討することも有効な作業であることを、あらためて認識した。さらに、実際の原稿調査として行なったのは、日本近代文学館「宇野浩二文庫」所蔵の宇野浩二の原稿である。この「宇野浩二文庫」は、「昭和四二年一〇月の文学館開館を記念する 近代文学名作展 開催のさい、令息の守道さんからいただき、以後昭和四七年三月まで、四回にわたって」(日本近代文学館『宇野浩二文庫目録』)寄贈された二〇三一点に上るコレクションだが、このうち原稿・草稿類としては、旧友芥川を回想した「芥川龍之介」の二百字詰原稿用紙五二三枚・草稿一三〇二枚、小説「友垣」の二百字詰原稿用紙四〇九枚・草稿七五三枚など、まとまった形で残されているものが少なくなく、いずれも完成原稿に倍する膨大な下書きの草稿が残されている点にも特色がある。とくに絶筆で未完となった小説「人間同士」の原稿は、二百字詰原稿用紙に書かれているが、題名・署名を記して本文を書き始めた最初一枚だけで、実に二百枚近い原稿が残されている。そのなかには、題名と署名だけのもの、一行目を書き出して中断しているもの、一枚目の終わり近くまで書いて途切れているものなど、おびただしいヴァリエーションがあり、こうした宇野浩二の特異な原稿執筆の営みを検討することによって、近代文学における本文生成の実際の過程に目を向けるなど、「編集文献学」構築のための基礎的な作業を積み重ねていった。

最終年度にあたる平成29年度においては、

初年度・2年度の調査・検討をふまえて、その成果を整理し、とりまとめることに力を注いだ。具体的には、「編集文献学」構築のための基礎資料として、「近代文学個人全集編纂・校訂史」ならびに「近代文学個人全集年表」などの作成をめざした(現在でも継続して作成中)。

また、そうした作業と平行しながら、デジタル化時代における本文のありかたを考察し、電子書籍やデジタル化による個人全集刊行の可能性と、その課題を検討した。作家の価値を、書物のボリューム(判型の大きさ、巻数の多さ、重量の大きさ、価格の高さ)によって体現しようとする個人全集は、典型的な重厚長大の商品であるが、今日、文学への関心の低下や出版不況、また購読者の経済的負担や時間的・空間的制約などによって、その刊行が年々難しくなる状況にある。こうしたなかで、デジタル化やオンラインによる「個人全集」の試みがあらわれており、こうした新しい刊行形態の可能性と課題について検討した。これらを通して、今後、文学テキストをどのような本文を通して次世代に受け渡していくことができるか、「編集文献学」のあたらしい模索をはじめたい。

#### 4. 研究成果

平成27年度は、資料の収集と研究を進めるための文献の整備に努め、まず明治期以降の個人全集の歴史的経緯を明らかにするために、その調査とリストを作成する作業を行った。具体的には、国立国会図書館・日本近代文学館・早稲田大学図書館といった図書館・文学館等での調査を中心とし、あわせて書店・古書店等から、近代の個人全集類や関係する参考文献を収集することにつとめた。

とくに力を注いで収集につとめたものの一つは、近代文学の開拓者である坪内逍遙の著書であり、いまだ完備した個人全集をもたない坪内逍遙の全集編纂の可能性を検討することで、近代作家のテキスト・著書の多様な成り立ちを明らかにするとともに、それらを個人全集としてどのように編集することが可能か、実践的に考察するための資料の調査・収集を試みた。

また、近代作家のテキストとして最も複雑な成り立ちをもつ中里介山「大菩薩峠」の本文研究をおこなう資料として、「大菩薩峠」のさまざまな刊本を収集し、本文成立の実態を研究するための資料の調査活動の一環とした。このほか、近代作家の原稿類についても、古書店などを通して、明治・大正期の原稿などのなかから、研究上必要と思われるものを何点か購入した。

また、こうした資料の調査・収集のほか、「近代文学草稿・原稿研究事典」(2015年、八木書店)に、近代の作家の原稿や原稿用紙、また宇野浩二の原稿についての論文を掲載するなど、研究成果の一端を公表することに

つとめ、これらを通して、第二年度目以降の研究の展開を期した。

平成 28 年度は、前年度に引き続き、資料の収集と文献の整備に努め、明治期以降の個人全集の歴史的経緯を明らかにするために、その調査とリストを作成する作業を継続して行った。具体的には、国立国会図書館・日本近代文学館・早稲田大学図書館といった図書館・文学館等での調査を中心とし、あわせて書店・古書店等から、近代の個人全集類や関係する参考文献を収集することにつとめた。

とくに力を注いで収集につとめたものの一つは、近代文学の開拓者である坪内逍遙の著書であり、これについてはおもに古書店を通して購入した。坪内逍遙には『逍遙選集』があるが、これは文字通りの選集で、いまだ完備した個人全集をもたない。坪内逍遙の全集編纂の可能性を検討し、その著書を具体的に全集として編集する過程を実践することで、近代作家のテキスト・著書の多様な成り立ちを実践的に明らかにすることを試みた。逍遙の著書は、翻訳や創作、評論、戯曲などジャンルにおいても多彩であり、また再版・再刊・改訂版など、刊行の形態も複雑なので、近代文学の本文研究と編集のありかたを考察するためには、もっともふさわしい対象であると考えている。

これに加え、近代作家の原稿類についても、古書店などを通して、明治・大正期の原稿のなかから、原稿用紙や表記などに特色があり、研究上必要と思われるものを何点が購入した。また、こうした資料の調査・収集のほか、日本近代文学会編『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』(2016年、ひつじ書房)に、近代文学の本文に対する注釈の問題を考察した「注釈」を掲載するなど、研究成果の一端を公表することにつとめた。これらの作業を通して、第3年目における研究への展開を期した。

最終年度の平成 29 年度には、坪内逍遙の本文研究、及び個人全集編纂の実践を課題としたが、最も大きな収穫は、最初の小説『当世書生気質』の初版にあたる十七分冊版(明治 18 - 19 年、晚青堂)の異版二種を収集し得たことである。表紙の意匠にも若干の違いがあるほか、本文の表記に相当大きな異同があり、近代文学の活字の本文成立の問題を具体的に明らかにする重要な資料である。

これらを通して、近代作家のテキスト・著書の多様な成り立ちを考察し、その本文編成の力学を明らかにしようとする本研究課題の一端は、達成することができたと考えている。そのうえで、今後の課題は、新たな『坪内逍遙全集』の構想と編集の実践で、逍遙の著書は翻訳や創作、評論、戯曲などジャンルにおいても多彩であり、また再版・再刊・改訂版など、刊行の形態も複雑なので、近代文

学の本文研究と編集のありかたを具体的に明らかにするとともに、「編集文献学」の実践的試行には最もふさわしい対象であると考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

宗像 和重、もう一つの『文章世界』 - 大月隆と文学同志会のことども -、早稲田大学文学研究科紀要、査読無、第 63 輯、2018、207 - 226

宗像 和重、福島鑄郎コレクション - その背景と概要 -、Intelligence (インテリジェンス)、査読無、第 17 号、2017、14-21

宗像 和重、漱石の「一字下ゲ」、図書、査読無、第 813 号、2016、8-11

中島 国彦・宗像 和重・源 貴志、新発見・二葉亭四迷ロシア滞在期の日記 2 冊 - その紹介と翻刻 -、早稲田大学図書館紀要、査読無、63 号、2016、1-64

〔学会発表〕(計2件)

宗像 和重、近代文学の「検閲」をめぐる、国際検閲ワークショップ、早稲田大学国際会議場、2018

宗像 和重、独歩と天皇、日本近代文学会春季大会、東京大学駒場キャンパス、2015

〔図書〕(計4件)

宗像 和重ほか 5 名共編、勉誠出版、『日本「文」学史 第二冊 「文」と人びと - 継承と断絶』、2017、561

宗像 和重ほか 26 名執筆、ひつじ書房、『ハンドブック 日本近代文学の方法』、2016、254

宗像 和重ほか 24 名執筆、朝日出版社、『日本発多言語国際情報発信の現状と課題 ヒューマンリソースとグローバルコミュニケーションのゆくえ』、2016、381

宗像 和重ほか 74 名執筆、八木書店、『近代文学 草稿・原稿研究事典』、2015、383

〔その他〕

特になし。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宗像 和重 (MUNAKATA, Kazushige)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90157727